法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-07-14

キャリア支援を考える 12 ： 事件がキャリア観を変える

川喜多, 喬 / Kawakita, Takashi

(出版者 / Publisher)
教育新聞社
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
教育新聞 / 教育新聞
(号 / Number)
2597
(開始ページ / Start Page)
3
(終了ページ / End Page)
3
(発行年 / Year)
2006-01

Hosei University Repository

キャリア支援を考える --12

事件がキャリア観を変える

法政大学キャリアデザイン学部教授　川喜多　喬

キャリア教育と銘打つ授業がキャリア観を変えることはほとんどないとあえて言う。組織人向けの「意識改革セミナー」が（物騒な洗脳型でない限り）意識改革にはならないのと同じである。意識改革の必要性や技法を理屈として座して学んでも、人の意識は容易に変わるものではない。

いっぱしの大人が意識を変えたといわれるのは、大抵事件に遭遇した後である。自分か身内が大病したとき、恋したり失恋したとき、思わぬ大役を与えられたり突然失業したとき、大失敗をしでかしたりスポットライトを浴びたとき、天変地異に遭遇したとき…。

これらの出来事をキャリア・インシデントとかキャリア・イベントと呼ぶ。キャリア形成上の偶発事態である。「歴史が君を大事件に直面させてくれないとしたら、あるいは大事件に間違ったときに～まだ君が若すぎるうちに、あるいは逆に君が年老いてしまったときに～直面させてしまったとしたら、君は決して大人物になれぬであろう」（ロイス・マクマスター・ビジョルド、『メモリー』）。

大人物になるかどうかは別として人がキャラクターを変えるのは平常時ではなく異常時であることが多いだろう。そうしたときにかけられたたった一言など、概して周りの人の言動であろう。だから本当に大事なキャリア支援が平常時の教室での教員の言動であるのは稀なことであろう。ゆえに限られた数のキャリア教育担当者への教育よりも、すべての人が他人を手助けできるホスピタリティとケアの精神と技法を教えられたり育てたりすべきであるという、いわば理想論に私はしがみつく。キャリア教育先進大学の立教大学では管理職には全員カウンセリングの訓練を受けさせているという。立派だ。

8カ月しか札幌にいなかったクラーク博士は「ボーイズ・ビー・アンビシャス」の言葉で多くの人のキャリアを変えた。もっとも博士はその後「ライク・ジス・オールド・マン」と言ったのであり、「ガキどもこの老いぼれのごとく志をもって生きるんだぞ、わかったな！」と言って自らを「キャリア・モデル」とせよと諭したのである。「親切な言葉は短く、簡単に言える。だが、その反響は、ほんとうにいつまでも続く」（マザー・テレサ）。進路指導の教科書を延々と読み聞かせるより、受験に失敗して落ち込んでいる子どもや交通事故を起こしてしまった少年への一言が遥かに「良く生きる」に効く場合も多いであろう。

逆境が人を強くするなどときれい事を言うつもりはない。クラーク博士も帰米後、事業に失敗し転落したのである。変に大望を抱くと事業に失敗し、まわりに迷惑をかける。だから、わざと事件に遭遇させろというものでもない。だが、この世は一寸先は闇。渡る世間は鬼だらけ。ほうっておいても事件に遭遇する。キャリアを変える人生の諸事件のダイナミズムを知らぬキャリア教育論はこれまたきれい事である。恋愛と生死を語らぬキャリア教育は中途半端と私が言うゆえんである。

<AN10113317>「教育新聞―The educational news」No.2597/pp3/2006.1.30